ソーシャルワーカーのプロフェッショナルコンピテンス概念の検討
―国内文献のレビューによる特性と要素の析出

社会福祉学研究科社会福祉学専攻博士後期課程２年
鈴木　智子

要旨

本研究の目的は、ソーシャルワーカーのプロフェッショナルコンピテンス（専門職の能力）の概念特性や要素を、国内文献の検討によって明らかにすることである。ソーシャルワーカーのコンピテンス、コンピテンシー概念に関する記述の質的な統合により、13のカテゴリが析出され、そのうち、中核的な概念特性は〈ソーシャルワーカーの職務上の目的や責務の遂行〉のため、〈知識・技能・価値を中心とするソーシャルワークの基盤要素〉を、〈実践において統合的・効果的に活用〉する個人の〈能力の総体〉であると規定した。また、先行研究から、知識・技能・価値を構成する要素のほか、ソーシャルワーク実践行動に関する10の要素、内面特性に関する5の要素が抽出され、これらの要素を、プロフェッショナルコンピテンスを構成するコンピテンシーとした。

キーワード：プロフェッショナルコンピテンス、コンピテンシー、文献レビュー、概念、ソーシャルワーク

１．研究の背景と目的

ソーシャルワーカーの能力向上の必要性は、専門職制度の確立に関する議論を嚆矢として、あるいは専門職性の向上や、福祉施策の実現に必要な条件として、提起され続けている。1960年代から1970年代にかけて社会福祉専門職の法定化が試みられた際には、社会福祉専門職能力をもつ人があまりに少なく、専門職制度は専門的能力の涵養を条件とするべき(嶋田 1972)との指摘がなされ、1987年の社会福祉士制度創設以後も、必ずしも「高い実践力を有する社会福祉士が養成されていない」(社会保障審議会福祉部会 2006：22)ことが課題とされている。最近では、地域共生社会の実現に対応するため、社会福祉士は「ソーシャルワ

ーク機能を発揮できる実践能力を身につけておく」べきであり、「地域の中で中核的な役割を担える能力を習得」する必要(社会保障審議会福祉部会 2018)があると指摘されている。このように、能力の向上は専門職の課題や目標として定型句のように語られているが、ソーシャルワーカーの能力とは何を指し、構成要素として何が含まれるのかについては、明確には示されていない。

英語圏には、ability、capability、capacity、competence、competencyなど、能力に相当する複数の単語がある。これら「能力」のうち、competence（コンピテンス）及びcompetency（コンピテンシー）（以後、この両者を示す場合は「コンピテンス等」とする）については、複数の研究・実践領域において人の能力を明らかにする目的で概念定義されているほか、ソーシャルワーカーを含む専門職の能力概念や要素や養成が、この用語のもとに議論されている。専門職の能力[1)]はprofessional competence（プロフェッショナルコンピテンス）とも表記され、H.M. Bartlett (1978：226)は、ソーシャルワークが社会に対して独自の貢献をするためには、ソーシャルワーカーのプロフェッショナルコンピテンスを明示していくべきであることを指摘している。国内ではソーシャルワーカーのコンピテンス等研究やコンピテンシーに基づく教育実践は増加傾向にあり、概念や要素に関する知見が蓄積されつつある。一方それらの研究・実践は、いずれもソーシャルワーカーという専門職の能力を扱っているものの、コンピテンスとコンピテンシーのいずれの用語を使用するか、また、どの研究領域を引用・参照するかによって概念特性が異なり、コンセンサスの得られた定義はない。本稿では、国内におけるソーシャルワーカーのコンピテンス等概念や要素に関する記述を抽出し分析することを目的とするが、この領域では、クライアント、職業人材など様々な属性のコンピテンス等が議論されていることから、ソーシャルワーカーの専門職としての能力に焦点を合わせる意味で、プロフェッショナルコンピテンスの用語を用いることとしたい。ソーシャルワーカーのコンピテンスの特性、構成要素については、小原(1997)や保正(2009)が主として国外の先行研究の分析により明らかにしているものの、国内の研究や実践を網羅的に抽出して分析している報告例は確認できない。コンピテンス等は、その国ごとの社会・文化的文脈の中で育成される(井上浩 2014)ものであり、国内文献の検討により、日本においてソーシャルワーカーの能力がどのように捉えられているかを明らかにすることができる。2021年度から導入が予定されている社会福祉士養成課程のカリキュラムは、「ソーシャルワークの専門職としての役割を担って行ける実践能力を有する社会福祉士を養成する」(厚生労働省 2019)ことが見直しの柱となっており、ソーシャルワーカーの専門職としての能力概念や要素の分析は、今後の社会福祉士養成の要点を明確にするためにも必要性が高いと考えられる。

２．研究の前提

(1) コンピテンスとコンピテンシーの意味、関係性と本稿での使用

辞書上の定義では、コンピテンスとは「何かをうまく行う能力」、コンピテンシーとは「特定の仕事や任務のために個人に必要となるスキル」を指す(オックスフォード大学出版局 2010：304)という。両用語の特性や関連について、コンピテンスは総称的な名詞で能力の全体を意味し、コンピテンシーはコンピテンスを構成する個別の要素 (Spencer and Spencer 2011, iii) (CSWE 2015：6,18)であると説明されている。国内のソーシャルワーク領域では、両者を同義として扱う立場があるほか、概念の違いを明確に区別せず(小原 2010)、いずれか一方、または両方を用いている文献が多い。本稿では、用語の特性にしたがい、コンピテンスは能力の全体、コンピテンシーはコンピテンスを構成する個別具体的要素として区別するが、先行文献において使用されている用語は、本稿の区別によらず引用のまま記載する。

(2) プロフェッショナルコンピテンスに関する暫定的な定義

国内では、プロフェッショナルコンピテンスを定義する文献はほとんど見当たらないため、国外の専門職研究においてプロフェッショナルコンピテンスがどう説明されているのかを概観し、暫定的に概念定義をおく。職業教育の観点から、M.Mulder (2014)は、プロフェッショナルコンピテンスを「専門的領域・業務・役割・組織の状況で、持続可能・効果的で、価値あるパフォーマンスを行なう能力」であり、「実際のパフォーマンスの文脈において利用されうる知識、技能、態度の首尾一貫した集合体」であると規定している。看護・ヘルスケア等論文のデータベースPubMedを管理するUS National Library of Medicine(2019)は、「あらゆる専門的職業または分野における能力」であり「容認可能なクオリティの技能により、一般的に自分の専門的職業の義務を遂行する能力、または特定の専門的なタスクを実行する能力」と説明している。また、ソーシャルワーク領域において、M.Bogo(2010：59)は、プロフェッショナルコンピテンスには多くの定義が存在することに触れながら、基本的には「専門職の行動の中に明確に表れる知識、技能、態度、価値の組み合わせ」を指すとしている。これら定義の共通点を捉えると、プロフェッショナルコンピテンスは、専門的職業・分野に求められる目的や義務を遂行するため、個々の状況に対して、専門職性の基盤となる要素を適切に組み合わせ、実行する能力を指すと暫定的に定義しうる。この定義について、図１のとおり図式化した。

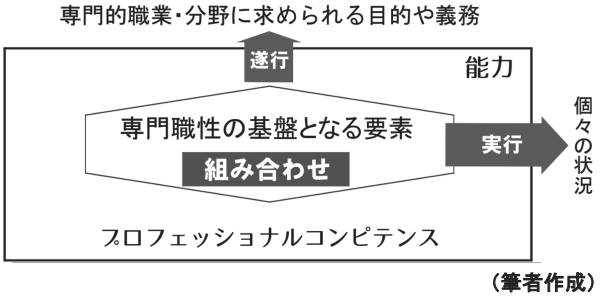

図１　プロフェッショナルコンピテンスの暫定的定義図

３．研究の方法

本研究では、大木(2013)による手法を参考として文献レビューを行う。大木は、文献レビューの実施にあたり、課題設定、文献検索、内容検討、文献統合というステップを示している(大木 2013：21–22)。本研究が設定する課題は、国内における知見を収集・分析し、ソーシャルワーカーのプロフェッショナルコンピテンスの概念特性や構成要素を明らかにすることである。文献検索については、研究領域のほか、実践現場におけるコンピテンス等概念を把握するため、学術論文に加えて書籍や冊子を抽出することとし、データベース検索に加えて、雪だるま式検索を行う。内容検討は、研究課題との関連性を検討し、直接レビューの対象とする文献を選定して読み込みを行う(大木 2013：64–65)ことを指す。関連性について、国内ではプロフェッショナルコンピテンスの用語のもとに行われている研究が確認できないため、「専門職の能力」という点で同様の意図をもつと判断される、ソーシャルワーカーのコンピテンス等に言及している箇所を読み込む。この際、国内の論者自身による概念や構成要素の検討・記述が確認できる文献のみを直接レビューの対象として抽出する。文献統合は、結果の整理と統合・解釈であり(大木 2013：73–74)、本稿では、２つのテーマにより行う。第一のテーマは、ソーシャルワーカーのプロフェッショナルコンピテンスの概念特性を検討することであり、この手法として、対象文献における概念記述を抽出、これを文節単位でテキストデータとし、カテゴリを生成したうえで、比較と対比(大木 2013：78–79)による質的な統合を行う。第二のテーマは、ソーシャルワーカーのプロフェッショナルコンピテンスの構成要素、すなわちコンピテンシーを明らかにすることであり、対象文献のうちソーシャルワーカーや養成校学生を対象としたコンピテンシーモデルの項目を抽出し、各項目をコード化したうえでカテゴリの生成を行う。

４．国内のソーシャルワーク分野におけるコンピテンス等定義・構成要素

(1) 国内文献の系統的抽出と対象文献の概要

学術情報検索サイト「CiNii Articles」、国会図書館「NDL ONLINE」、「国立国会図書館サーチ」において、1960年～2019年7月に収録されている文献のうち、「コンピテンス」また

は「コンピテンシー」（各英語表記を含む）という用語と「福祉」「ソーシャルワーク」「ソーシャルワーカー」の用語についてアンド検索を行った。同一のキーワード検索結果内における同一文献を除外した該当数は、表1のとおりであった。

表１　コンピテンスまたはコンピテンシーに関する文献該当数

	CiNii Articles		NDL ONLINE・国立国会図書館サーチ	
	コンピテンス	コンピテンシー	コンピテンス	コンピテンシー
福祉	294	142	66	101
ソーシャルワーク	20	6	7	9
ソーシャルワーカー	31	16	13	11
合計	345	164	86	121

検索：2019 年 7 月時点　筆者作成

キーワード間の重複を除いた実論文数は414編、実書籍数は108編であり、このうち、文献の論者自身によって、ソーシャルワーカーのコンピテンス等の概念・構成要素が明らかにされている文献を抽出対象とした。なお、本稿においては、ソーシャルワーカーに、養成校学生、基礎資格として社会福祉士が含まれている職種（介護支援専門員や児童福祉司）を含めている。結果として、概念定義が引用のみの文献、他専門職対象、学会資料、辞典、国外論者等を除外し、論文26編、書籍6編を対象とした。さらに、引用文献確認、同一論者の文献検索等により、論文1編、書籍16編を追加、計49編を対象文献とした。対象文献の年代別の文献数は表２のとおりであり、2000年代以降増加傾向にあることが分かった。

表２　ソーシャルワーク領域で、論者自身によるコンピテンス等概念・要素の記述がある文献（日本国内・年代別）

西暦年代	ソーシャルワーカー養成教育研究・実践	ソーシャルワーク実践におけるコンピテンス等研究・実践	合　　計
1980-1989	0	1	1
1990-1999	1	2	3
2000-2009	9	14	23
2010-2019	12	10	22
合　計	22	27	49

※カルチュラルコンピンスや IPW、チーム・コンピテンシーに関する文献を含むが、そのうち、ソーシャルワーカーのコンピテンス等に関する記述のある文献のみ対象としている。

2019 年 7 月時点　筆者作成

(2) コンピテンス等概念の特性抽出によるプロフェッショナルコンピテンス概念の検討

ソーシャルワーカーのコンピテンス等概念がどのように規定されているかを明らかにするため、論者自身による、概念の定義・特徴に関する記述から意味のある文節を抽出のうえデータとし、表３のとおりカテゴリを生成した。

表３　対象文献におけるソーシャルワーカーのコンピテンス等概念特性

分類カテゴリ	概念カテゴリ	データ　●コンピテンス概念から抽出　■コンピテンシー概念から抽出
概念の特徴	ソーシャルワーカーの職務上の目的や責務の遂行 (9)(9)	●成果をもたらす業務の遂行度に関わる能力(奥田 1992：214)　職責遂行に必要/目的達成のために遂行/問題に効果的な方法を開発(小原 1997)　問題解決につながるような力量(松岡克尚 2001)　ソーシャルワーカーに対する要求や義務を遂行する(保正 2009)　特定の目的を遂行（村井 2009：217；村井 2014：100)　職務遂行能力を捉える概念(保正 2013：Viii)
		■職務行動に必要/職務に対するもの(菊地 2004)　業務遂行に視野をおく(伊藤 2008：174)　ソーシャルワーカーとして必要な行動や活動を遂行(福島 2009：37)　職務に有効な実践力/職務領域の中で求められる(井上貴詞 2012)　職務環境や職務上の要請に対応する/職務に求められる結果をもたらす/仕事上の責務を遂行(山辺 2015：50)
	知識・技能・価値を中心とするソーシャルワークの基盤要素(8)(9)	●知識（8）　技術・技能（8）　価値（4）　技法（1）　思考枠組（1）(米本・安井 1989；小原 1997；社団法人 日本社会福祉士養成校協会 2009：257；村井 2009：217；保正 2009；守本 2010；保正 2013：2；村井 2014：100)
		■知識（9）　技術・技能（9）　価値（4）　態度（2）　倫理(1)　判断力(1)(Bogo・高橋 1991；福島 2005：25；原 2009；菊地 2009；松岡千代 2009；山辺 2015：52；山辺 2017：208；山田 2018：133；谷口 2018) ※各論者があげている要素を列挙
	ソーシャルワークの基盤要素を、実践において統合的・効果的に活用 (4)(4)	●各要素の統合化/統合化・効果的活用(小原 1997)　知識、価値、技術の適切な統合(保正 2009)　価値・知識・技術を適切に混合(保正 2013：2)
		■技能、知識等を実践の中で効果的に活用する能力/価値・知識・技能の効果的活用(福島 2005：25,53)　素質や要素をふさわしいときに適切に動かし、統制できる能力(福島 2009：37)　構成要素は渾然一体(山辺 2017：209)
	能力の総体 (4)(4)	●統合する一連の能力(小原 2010)　実践能力の総体(岡本・平塚 2004：11；保正 2009)　能力の総体(木原 2009:210)
		■統合的能力（菊地 2004）　包括的能力/有機的統合、組み合わされて発揮(井上貴詞 2010)　総合的な能力や力量（福島　2009：37)
	技能（スキル）の具現化・発揮に関与 (6)(0)	●技能を発揮する能力を開発/技能の総体を構成するもの(奥田　1992：213,214)　コンピテンスを通してスキルが具現(岡本・平塚 2004：11)　スキル、スキルズの概念を補う能力概念(福島　2005：52)　確実で創造的なスキルによる統合(小原 2010)　技術を通して具現化(保正 2013：14)
	ソーシャルワーク専門職性に関連(10)(3)	●ソーシャルワークの専門性と密接に関連/専門的能力、適性、資質、資格、実力（小原 1997）ソーシャルワーカーの事象の認知・認識能力(岡本・平塚 2004：11)　専門職としての力量・能力・適性/専門職意識(社団法人 日本社会福祉士養成校協会 2005)　ソーシャルワーカーとしてのアイデンティティや自律性と相補的関係/倫理綱領に規定(保正 2009)　専門職の総合的な介入における能力(木原 2009:210)　専門性の認識が可能(守本 2010)　ソーシャルワーカー側の専門的力量(山口・西梅・加藤 2018)
		■対人援助の実践者の力量や専門性、実行能力を示す(井上貴詞 2010)　ソーシャルワーカーとして必要な行動や活動を遂行(福島 2009:37)　専門職の職業能力の指標(橋本・柿木・小口・ほか 2015)
	実践の質や能力の客観的な評価が可能になる(3)(12)	●評価対象/対人サービス分野等の教育効果の測定/養成の到達目標の明確化が可能(守本 2010)
		■業務評価が行えないものはコンピテンシーとは言えない/客観的評価と理解が可能(社団法人 日本社会福祉士養成校協会 2004：Ⅰ-1,11)　能力を測定、評価する必要性が強調/能力を評価するときに用いられる(福島 2005：53-54)　評価に活用/思考や行動を客観的に評価(藤田・山本・青木 2008)　能力評価(藤田・山本・青木 2008；保正 2009；関西学院大学実践教育研究会 2014：116) 客観的基準で評価可能(富士福祉会 2009a：2)　資格等級制度や評価制度（人事考課）で導入(富士福祉会 2009b：12)　教育効果測定(橋本・柿木・小口・ほか 2015)
概念の構成	行動に影響を与える個人の内面特性(4)(15)	●動機づけ(小原 1997)　達成動機実現/動機、意欲(渡辺 2005)　継続的、安定的動機のもと行動として表出(藤田・山本・青木 2008)
		■内的部分を含めた特性/動機、価値観、性格、特性、使命感(社団法人 日本社会福祉士養成校協会 2003：6-7)　業績に関わる個人の特性(菊地 2004)　行動特性の背景にある考え方や価値観を抽出/動機、挑戦意欲、気質、価値観、考え方、信念、性格、気性、忍耐力(渡辺 2005) 行動の結果である良好な業績や成果の側から個人的特性を捉えなおす(菊池　2006)　成果をあげるまでに発揮された思考・ストレス耐性やメンタルの強さを含める(藤田・山本・青木 2008) 個人が内的に保有/動機・動因、性格・人格・価値観(井上貴詞 2010)　動機の高さが寄与(矢崎・中村・野寺 2012)　発揮される能力の根源的特性（価値や自信）も重要(井上貴詞 2012)　個人の特性としての能力(山辺 2015：50)　その人の特性やパーソナリティ/内面に含まれている動機や特性を基盤とする（種村・小口・柿木・ほか 2015)　特徴的に見られる考え方(辻岡・藤本・川見・ほか 2018)

分類カテゴリ	概念カテゴリ	データ　●コンピテンス概念から抽出　■コンピテンシー概念から抽出
概念の構成	行動・行動特性 (0)(18)	■行動特性(菊地 2004；渡辺 2005；小原 2010；富士福祉会 2009a：2；富士福祉会 2009b：12；井上貴詞 2010)　行動を表す言葉で規定/成果に結びつく行動(渡辺 2005)　一連の行動特性全体(菊池 2006)　行動特性であり、実際の行動に反映されている(東京都児童相談所 2007)　成果をあげるまでに発揮された行動(藤田・山本・青木 2008)　本人の行動が判断の対象になる(富士福祉会 2009a：2)　人の行動を取り扱う(富士福祉会 2009b：12)　成果をあげ続けることができる行動特性/再現性のある成果行動能力(千葉・富樫・小崎・ほか 2010)　必要な行動特性を見極める(種村・小口・柿木・ほか 2015)　特徴的に見られる行動(辻岡・藤本・川見・ほか 2018)　観察可能な行動特性(細谷 2019：125)
	環境との相互作用により培われる能力(7)(2)	●環境の質や程度により左右/環境の中での効果的な対処と適応/社会環境や物理的環境の側面との相互作用の中で成長発達(小原 1997)　環境に働きかけ、環境との間に適切な関係を作り上げる能力(渡辺 2005)　人と環境との相互作用を通じて表出(藤田・山本・青木 2008)社会的・物理的環境との相互作用を通して、対処、適応、発達（小原 2010)　環境との関わりのなかで培われる力量(山口・西梅・加藤 2018)
		■社会・物理的環境との作用で成長発達(小原 2010)　環境との交互作用(井上貴詞 2012)
達成の水準	高業績者・優れた専門職から抽出される(0)(10)	■高業績者の行動、特性(社団法人 日本社会福祉士養成校協会 2003：6)　卓越した高業績者の知見の一般化(社団法人 日本社会福祉士養成校協会 2004：Ⅰ-11)　高業績者にみられる行動特性に着目(渡辺 2005)　持続的に高い成果をあげている人(東京都児童相談所 2007)　高業績者の行動特性を分析(藤田・山本・青木 2008)　優秀な人材(富士福祉会 2009a：2)　「できる職員」の行動特性を抽出/成功している、優秀な社員(富士福祉会 2009b：12,17)　優れた専門職(菊地 2009)　高業績を上げる人(辻岡・藤本・川見・ほか 2018)
	高い成果・卓越した業績を生む能力(0)(12)	■効果的あるいは卓越した業績を生む(菊地 2004)　成果を上げるために有用(社団法人 日本社会福祉士養成校協会 2004：Ⅰ-1)　高い成果を上げうる能力(渡辺 2005)　より卓越した業績を実現(菊池 2006)　卓越した業務を峻別(藤田・山本・青木 2008)　成果をあげ続けることのできる(藤田・山本・青木 2008；千葉・富樫・小崎・ほか 2010)　卓越した能力(松岡千代 2009)より高いパフォーマンスを獲得するために応用(富士福祉会 2009b：12)　職務において効果的・卓越した業績を生む要因(井上貴詞 2010)　繰り返し成果を出し続けることができる能力(関西学院大学実践教育研究会 2014：116)　特定の成果を出す(細谷 2019：127)
	基礎的能力 (1)(4)	●英国はミニマムレベルの基準の明確化(社団法人 日本社会福祉士養成校協会 2003：6)
		■最低限やってほしい仕事内容(富士福祉会 2009b：17)　対人援助職としての基礎能力等(千葉・富樫・小崎・ほか 2010)　最低限卒業時に何ができるのかを具体的に示せること(井上浩 2014)　実践力に結びつくような基本的・汎用的能力(矢崎・中村 2018)

※概念カテゴリ文末　前（ ）はコンピテンス・後は（ ）コンピテンシー概念から抽出されたデータ数　データ内の「/」は同一文献による異なる文節　※5 以上のデータが確認されたものを掲載した。　（先行文献を基に筆者作成）

①　概念の特徴

以下、生成した概念カテゴリを〈　〉で表記する。対象文献によれば、コンピテンス等は、〈ソーシャルワーカーの職務上の目的や責務の遂行〉のため、〈知識・技能・価値を中心とするソーシャルワークの基盤要素〉を、〈実践において統合的・効果的に活用〉する〈能力の総体〉を指す。この概念カテゴリは、プロフェッショナルコンピテンス概念の暫定的定義とほぼ内容が重なっており、プロフェッショナルコンピテンスの中核をなす概念特性といってよいと判断される。日々の実践において、ソーシャルワークの基盤要素を常に意識に顕在化させているソーシャルワーカーはむしろ少数であろうし、このカテゴリが概念の中核をなすことに違和感をもつ実践者もいるかもしれない。しかし、ソーシャルワーカーは、養成課程での学びを根底におき、現場での個々の実践経験をふまえた省察によって、それぞれのソーシャルワークの知識・技能・価値を育み、次の実践に活かしているのであり、そのあり様がそれぞれの専門職性を形作っている。つまり、プロフェッショナルコンピテンスとは、

各自が保有する知識・技能・価値を、個々の実践に合わせてうまく組み合わせて適用する能力を指し、一人ひとりのソーシャルワーカーの〈ソーシャルワーク専門職性に関連〉している。また、コンピテンス等は、ソーシャルワークの基盤要素のうち技能との関連が深く、〈技能（スキル）の具現化・発揮に関与〉する。福島(2005：48,52-54)によれば、スキルは可算名詞の場合は行動・作業を、不可算名詞の場合は能力を指すが、英米ではスキルの概念を補い、ソーシャルワーカーの「能力」を強調したいときにコンピテンスの概念を用いてきたという。福島は、ソーシャルワーク実践スキルを「ソーシャルワークの価値を基盤にして行う特別な知識や訓練を要する行動（言動）」と規定している(福島 2005：24)が、コンピテンス等概念に含有される技能は可算名詞として捉えるべきであり、福島が規定するところのスキルを具現化し、ソーシャルワーク実践において統合的・効果的に活用する能力が、ソーシャルワーカーのプロフェッショナルコンピテンスであるといえる。さらに、コンピテンス等の枠組みを活用することにより、教育や現場における〈実践の質や能力の客観的な評価が可能になる〉。この場合、顕在化した実践行動がコンピテンス等の要素として強調されることになる。

② 概念の構成

コンピテンス等には、成果に結びつく具体的〈行動〉や成果を生み出す人に共通してみられる〈行動特性〉、〈行動に影響を与える個人の内面特性〉が包含される。〈個人の内面特性〉が〈行動・行動特性〉に影響を与えて効果的業績を生むというフローは、L.M.SpencerとS.M.Spencer (2011：16)が、専門職・対人援助職を含む職業人材への膨大な調査分析から明らかにしたコンピテンス等に関する知見であり、プロフェッショナルコンピテンスに包含される特性と規定しうる。〈環境との相互作用により培われる能力〉という概念カテゴリは、動機づけ理論におけるR.W.White（1959）のコンピテンス概念が主たる由来であり、ソーシャルワーク領域においてはクライアント側のコンピテンスとして議論されることが多い。一方対象文献においては、ソーシャルワーカーのコンピテンスの一要素、あるいは専門職のコンピテンスの成長に影響する能力特性として着目している。環境と相互作用を行う能力がプロフェッショナルコンピテンスの背景にあって影響を与えている可能性は否定できないものの、専門職としての能力との関連性が見いだしにくいことから、本稿ではプロフェッショナルコンピテンスの概念特性には含まれないという立場をとる。

③ 達成の水準

コンピテンス等がどのようなレベルの業績を対象とするのか、という達成の水準については、〈高業績者・優れた専門職から抽出される〉、〈高い成果・卓越した業績を生む能力〉を指す立場と、〈基礎的能力〉を指すという立場がある。両論を併記している文献(社団法人

日本社会福祉士養成校協会 2003：6)もあるが、〈高い成果・卓越した業績〉に限定した能力であるとする立場も多く、プロフェッショナルコンピテンスにおける達成の水準とはいずれを指すのか、あるいは両方を含むのかについて、検討が必要である。

M.Kaneは、プロフェッショナルコンピテンスの評価方法を検討するにあたり、専門職の目的は、クライアントが必要とする専門的支援を適切に提供することであり、これを提供できるのが有能（competent）な実践者であると述べている(Kane 1992：166)。Kaneの言う専門的支援の適切な提供は、全てのソーシャルワーカーにひとしく達成を求められることがらである。また、アメリカでは、全ソーシャルワーカー養成校の教育ポリシーと認可水準（EPAS）がコンピテンシー・ベースにより明示されているが、その内容は、「プロフェッショナルコンピテンスの閾値を確証」するもの(CSWE 2015：5)であるという。これらによれば、プロフェッショナルコンピテンスは、一部の実践者による〈高い成果・卓越した業績〉に限定された能力ではなく、全ての実践者がソーシャルワークの目的の達成のために有する、あるいは有することを期待される〈基礎的能力〉を含むと考えるべきである。一方、〈高い成果・卓越した業績〉は、ソーシャルワーク領域におきかえれば、専門職として求められる目的を十分に、あるいは数多く達成する「優れたソーシャルワーク実践」と表現しうると思われるが、プロフェッショナルコンピテンスを構成する要素の組み合わせによっては、優れたソーシャルワーク実践を実現することも可能になる。つまり、プロフェッショナルコンピテンスは、全てのソーシャルワーカーが等しく有する、あるいは有するべき基礎的能力を含むが、保有するコンピテンシーの種類や程度、組み合わせによって優れたソーシャルワーク実践を実現する可能性を持つ能力であると考えられる[2)]。

(3) プロフェッショナルコンピテンスを構成するコンピテンシー

① ソーシャルワーカーを対象としたコンピテンシーモデル項目の分類

プロフェッショナルコンピテンスを構成する個別具体的要素となるコンピテンシーを検討するため、対象文献のうち、ソーシャルワーカーや養成校学生のコンピテンシーを明らかにしている12の文献(社団法人 日本社会福祉士養成校協会 2004；池田 2005；菊池 2006；東京都児童相談所 2007；藤田・山本・青木 2008；富士福祉会 2009a；小原 2010；関西学院大学実践教育研究会 2014；種村・小口・柿木・ほか 2015；北海道ブロック実習前評価システム検討小委員会 2015；上白木 2018；辻岡・藤本・川見・ほか　2018)による616のコンピンシー項目をコード化し、各文献が設けている分類項目を参照しながら、表４のとおり質的な統合を図った。統合にあたっては、コンピテンス等概念の抽出において確認された概念カテゴリのうち〈知識・技能・価値を中心とするソーシャルワーク実践の基盤要素〉、〈行動・行動特性〉、行動に影響を与える〈個人の内面特性〉を採用し、この領域にしたがって演繹的に各コードを分類した。〈行動・行動特性〉については、抽出されたコードの内容に合わせて

「ソーシャルワーク実践行動」とした。コードは各領域に無理なく分類でき、各領域の下位要素として位置づけられると判断した。

表４　国内コンピテンシーモデルから抽出したソーシャルワークコンピテンシー分類

領域	コンピテンシーカテゴリ	コード　文末〈〉は該当コード数
ソーシャルワーク実践の基盤要素	知識〈80〉	現場・組織〈23〉　技能・方法・技法〈15〉　対象（地域特性・利用者）〈9〉　制度・法令〈8〉　援助全般・理論〈7〉　専門職固有性〈6〉　課題〈6〉　調査統計〈2〉　社会・社会問題〈2〉　価値〈1〉　人間〈1〉
	技能〈61〉	面接技法（関わり・感情を返す・共感的態度・傾聴・質問・焦点化・積極・要約・話しやすさ）〈26〉　実践内容（アセスメント・介入・評価・グループ運営・計画策定）〈21〉　専門職としての視点と機能実現（的確な観察・環境やストレングスへの着目・代弁・エンパワメント）〈7〉　システム・ツール活用〈3〉　援助技術の保有と適用〈2〉　スーパーバイズ〈2〉
	価値〈21〉	利用者の個別性尊重〈8〉　人権尊重・尊厳保持〈7〉　価値の理解・実践〈3〉　多様性受容〈2〉　対象者の生命と利益重視〈1〉
ソーシャルワーク実践行動	対人関係構築〈54〉	利用者や関係者との関係構築（信頼構築・報告や相談・他職員サポート・職員間や当事者とのコンフリクトの調整・地域に行って理解を得るなど）〈20〉　基本的コミュニケーション（場面に応じた身なり・礼儀・挨拶・電話応答など）〈18〉　専門的コミュニケーション（会話を通じた状況や感情の的確な把握・視線・姿勢・相手に応じた話し方・言葉遣い・声の質など）〈16〉
	基本的業務遂行〈38〉	マネジメント（時間厳守・締め切り・リスク・安定）〈13〉　関心・状況に応じた行動〈7〉　指導・助言力〈6〉　効率的事務処理〈5〉　実習・業務計画作成変更〈4〉　所属組織の目標達成〈3〉
	的確な情報収集・記録・共有〈38〉	情報の収集と共有〈19〉　的確な記録の把握・管理・活用〈19〉
	意見伝達・プレゼンテーション〈27〉	口頭での意見・説明〈10〉　書面での意見伝達〈8〉　自己紹介〈3〉　プレゼンテーション全般〈3〉　支援上の自らに関する表明〈3〉
	企画・合意形成〈26〉	提案〈6〉　企画立案〈5〉　当事者・職員・他機関との合意形成〈4〉　ネゴシエーション〈4〉　共感や理解の獲得〈3〉　会議進行力〈2〉　支援につながる場の形成〈2〉
	ソーシャルワークプロセスの実行〈25〉	モニタリングと評価〈11〉　計画策定〈10〉　引継ぎ・終結〈2〉　目標設定〈1〉　インテーク〈1〉
	他機関連携・チームアプローチ〈20〉	他機関の把握と連携〈10〉　チームアプローチ・ネットワーキング〈8〉　他機関とのコンフリクト調整〈2〉
	根拠ある実践〈17〉	理論に基づく〈5〉　計画に基づく〈4〉　利用者に応じた〈3〉　専門性に基づく（2）　ニーズに応じた〈2〉　法律に基づく〈1〉
	社会資源の創出や活用〈8〉	資源の活用・調整・マッチング〈5〉　人材の創出や活用〈3〉
	倫理に基づく行動〈6〉	倫理実践〈2〉　倫理行動〈2〉　守秘義務〈2〉
内面特性	理解〈57〉	実践内容・理論（事例・記録・カンファレンス・評価・面接など）〈11〉　技能・方法・技法〈10〉　価値と倫理〈9〉　制度〈5〉　対象者・家族・機関〈5〉　スーパービジョン〈4〉　専門性〈3〉　コミュニケーション〈3〉　倫理上のディレンマ〈2〉　理念・目的〈2〉　社会問題〈2〉　リスクマネジメント〈1〉
	観察・判断〈56〉	観察と把握（課題や問題点・事実・利用者の特徴やニーズ・地域特性など）〈17〉　学習・研究（論理的思考・関心や問題意識・資料読解など）〈16〉　判断力〈6〉　分析力〈5〉　予見〈5〉　評価する力〈3〉　俯瞰的視点〈2〉　視野の広さ・長期的展望〈2〉
	自己覚知・統制〈36〉	自己（印象・性格理解・影響力・学習判断傾向・行動・自己覚知や洞察）〈19〉　心身・感情コントロール〈8〉　ストレス耐性・調整〈5〉　専門職としての資質向上〈3〉　バランス感覚〈1〉
	性格・態度〈34〉	責任感〈6〉　協調性〈4〉　動機の高さ〈3〉　変革への努力〈3〉　素直さ・適応性〈3〉　覚悟・使命感〈2〉　忍耐力〈1〉　発展的志向〈1〉　包容力〈1〉　ポジティブ〈1〉　自信〈1〉　戦略的思考〈1〉　創造的思考〈1〉　達成志向〈1〉　信念〈1〉　豊かな人間性〈1〉　影響力〈1〉　意思決定力〈1〉　倫理的思考〈1〉
	省察・経験から学ぶ力〈13〉	失敗や体験から学ぶ〈7〉　省察・振り返り〈6〉

※コンピテンシーとして分類困難な項目を除外し（７項目）、２種類の内容を含むと判断された項目を重複計上（６項目）している。

（先行文献を基に筆者作成）

② 文献統合によるプロフェッショナルコンピテンスの構成要素

表４のとおり生成されたコンピテンシーカテゴリについて、地域包括支援センターにおける高齢者虐待の解決支援という、ソーシャルワーク実践の具体例に沿って示してみたい。以下、カテゴリを下線で示す。

地域包括支援センターに属するソーシャルワーカーが近隣住民から高齢者虐待の通報を受けた場合、まず通報者から必要な情報を収集し、記録をとるほか、必要な職員の間で情報共有を行い、目標の設定・計画策定など当面の支援方針を立案する。高齢者本人の自宅に訪問し面接を行う際には、虐待が疑われる家族の言動や態度、両者の関係性を観察し、どのような発言や質問を行えば家族や本人と関係構築ができるか、支援に必要な情報を収集できるかを瞬時に判断しながらコミュニケーションをとる。家族がソーシャルワーカーに対して威圧的に接したり、拒絶したりする場面においても、責任感や忍耐力などの個人の性格や態度を根底におきながら、面接に関する技能を活用し、対人関係構築に努めることとなる。この際には、感情のコントロールなど自己統制が必要となるし、相手に与える印象や自らの性格理解など自己覚知も求められる。高齢者本人の権利を擁護（価値の尊重）するために、家族に虐待の抑止について必要な意見を伝達しなければならない場合もあるし、受容的態度を貫くべき場合もある。面談のあと、精神保健福祉、生活困窮者支援など他の機関と連携を図り、チームアプローチで、虐待の解消・世帯全体の課題解決に向けた介入をしていくが、この際には、定期的に会議を開くなどして支援方針に関する合意形成を図っていく。支援にあたっては、関係する法律や支援計画に基づく根拠ある実践、倫理に基づく行動が求められるほか、約束の時間を守る、リスクマネジメントを行うなど基本的な業務遂行力も必要となる。本人や家族が抱える課題の解決につながる社会資源を活用するほか、資源が不足している場合には新たに創出するという実践も求められる。資源の創出にあたっては、地域住民等多様な主体が関わる事業を企画し、なぜその資源が今必要なのか、というプレゼンテーションを行って、活動に巻き込んでいく。一連の支援においては、制度や技能に関する専門的な知識が求められ、対象者や家族の理解を深めることが重要となる。支援の経過について、必要な頻度でモニタリングをし、課題が解決したと評価された場合は終結する（一連のソーシャルワークプロセスの実行）。ソーシャルワーカーは、家族や高齢者本人との関わりの経験を通じて学び、自らの実践を省察することで、各自の専門職性を向上させ、次のより良い実践に活かしていく。

ここでは高齢者虐待支援という例を使用したが、その他の実践場面においても、ソーシャルワーカーは、実践過程の随所で自らの内面特性を活用し、その影響を受けた実践行動をとることによって、ソーシャルワークの知識・技能・価値を組み合わせ、個々の実践に適用することになる。これらの総体がプロフェッショナルコンピテンスであり、今回抽出されたカテゴリは、ソーシャルワーカーのプロフェッショナルコンピテンスを構成するコンピテンシ

ーと整理しうる。コンピテンシーのうち、特に〈ソーシャルワーク実践の基盤要素〉の実践への適用や、〈ソーシャルワーク実践行動〉については、これまでのソーシャルワーク研究や実践においても多々語られてきたことである。その点でいえば、プロフェッショナルコンピテンスの概念枠組みの特徴は、ソーシャルワーカーの観察や判断、性格や態度、省察といった〈個人の内面特性〉の影響を重視する点にあると思われる。EPAS2015では、ソーシャルワーク実践におけるコンピテンスは、知識、価値、技能と、観察や判断、感情の反応などの「認知的・情動的なプロセス」を統合した行動(CSWE 2015：6,20)により構成されると説明しており、本稿における分析と概ね一致している。

③　ソーシャルワーク実践行動と知識・技能・価値の関連性

コンピテンス等は〈技能（スキル）の具現化・発揮に関与〉するという概念カテゴリが抽出されたとおり、ソーシャルワークの基盤要素の中でも、技能（スキル）とコンピテンスの関係は深い。福島(2005：24)の定義にあるとおり、技能も行動として顕在化するものであり、技能とソーシャルワーク実践行動には重なりあう点がある。今回抽出されたコード内容を確認すると、例えば、ソーシャルワーク実践行動には、利用者との信頼関係構築行動、そのためのコミュニケーションがあり、技能には、面接場面における傾聴や話の焦点化がある。両者を比較すると、ソーシャルワーク実践行動は技能に比べて行動の単位が大きく、また、その項目自体はソーシャルワーカーに固有のものばかりとは言えない。専門職としての固有性は、ソーシャルワーク実践行動の細部に現れる技能にあり、技能とはソーシャルワーク実践行動に包含される「ソーシャルワークの価値を基盤にして行う特別な知識や訓練を要する」(福島 2005：24–25)言動と整理しうる。例えば、コミュニケーションなどによる「対人関係構築」は、一般的に他の専門職にも求められる能力要素だが、その際に活用される技能こそが、ソーシャルワーカーとしての専門職性を特徴づける。技能の基盤にはソーシャルワーク固有の価値があり、また、ソーシャルワーク固有の知識が技能の根拠となる。

５．文献統合をふまえた概念構成

以上の検討をふまえて、国内におけるソーシャルワーカーのプロフェッショナルコンピテンス概念構成図を図２のとおり作成した。

なお、本稿分析の結果である表３、４及び図２について、４名の社会福祉士（うち１名は研究経験者）に提示し、実践の場にいるソーシャルワーカーの認識とのずれの有無、妥当性や項目分類の適否に関する意見を聴取した。結果、データや図の分かりにくさについて意見を受けて一部修正したものの、概ね妥当であり実践上の認識と一致しているという回答が得られた。

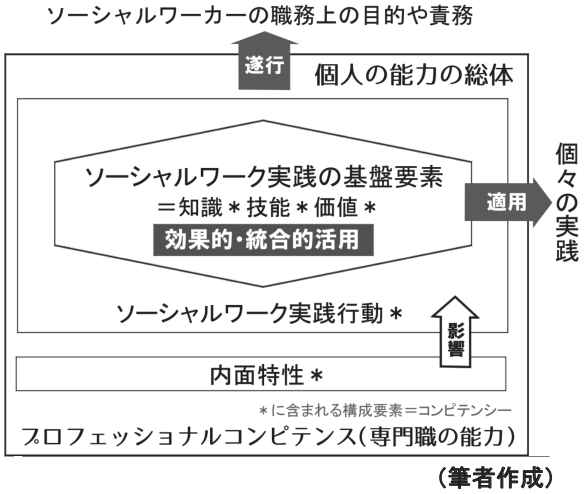

図２　ソーシャルワーカーのプロフェッショナルコンピテンス概念図

以上による本稿分析の結果として、ソーシャルワーカーのプロフェッショナルコンピテンスとは、ソーシャルワーカーの職務上の目的や責務を遂行するため、ソーシャルワーク実践の基盤要素である知識・技能・価値を、効果的・統合的に活用して実践に適用する個人の能力の総体であると規定する。プロフェッショナルコンピテンスには、知識・技能・価値、ソーシャルワーク実践行動や個人の内面特性が含まれ、これらを構成する個別具体的な要素としてコンピテンシーがある。内面特性が実践行動に影響し、実践行動を通じて、知識・技能・価値が効果的・統合的に組み合わされて、個々の実践に適用される。プロフェッショナルコンピテンスは、全てのソーシャルワーカーが有している、あるいは有することが期待される基礎的能力を含むが、コンピテンシーの組み合わせ、効果的な活用によって、優れたソーシャルワーク実践を生み出す可能性をもつ、力動的な能力である。

６．課題と今後の展望

本稿分析の課題として、今回構成要素の対象としたコンピテンシー項目には、養成校学生を対象としたものが含まれることから、ソーシャルワーカーとしての能力に関する項目に加え、養成校学生として保有するべき能力要素が強調されていることがあげられる。例えば、〈知識〉や〈理解〉のコード数が多いのは、この影響が大きいと思われる。また、構成要素の根拠としたコンピテンシー項目は、ソーシャルワーカーの実践から抽出した内容も含まれるものの、全体としては、ソーシャルワーカーとして獲得するべきコンピテンシーが網羅的かつ規範的に記載されている点に留意が必要である。実践者からの意見聴取においても、コンピテンシー項目には社会福祉士養成のための政策的意図が含まれることを考慮すべきであるとの指摘を受けている。その点で、本稿で抽出された構成要素は、ソーシャルワーカーとして働く者が、最低限保有しておくことを期待されるジェネリックな能力が列挙されたもの

と捉えるべきであろう。実際のソーシャルワーク実践においては、今回抽出されたコンピテンシーが均一に発現・活用されるわけではなく、例えば個別支援・地域支援の別など、ソーシャルワークの目的や領域に応じて活用されるコンピテンシーは異なる。また、個々のソーシャルワーカーが保有しているコンピテンシーも、現実的には様々である。ソーシャルワーカーの実践から帰納的にコンピテンシーを抽出する研究(菊池 2006など)は少数であり、今後、実際のソーシャルワーク実践から抽出されたコンピテンシーからなる、領域限定的なプロフェッショナルコンピテンス構造を明らかにすることが、「高い実践力を有する」(社会保障審議会福祉部会 2006)ソーシャルワーカーの養成のために有効ではないかと考えられる。

注

1) 小松は、Bartlettの著書において、professional competenceを「専門職としての実行力」と翻訳している(Bartlett 1978：226)。政策上使用されている「実践能力」との関連でいえば、米本・安井(1989)、小原(1997)はコンピテンスを実践能力と表記している。本稿では能力と訳すが、コンピテンスと実践能力は同義と考えて差し支えないと思われる。

2) 職務全般におけるコンピテンシーを研究したL.M.SpencerとS.M.Spencerは、概念定義においては「卓越した業績を峻別する」能力と規定しているが、分類としては、必要最低レベルと、卓越を峻別するコンピテンシーの両方が存在する(Spencer and Spencer 2011：11,19)と述べており、本稿規定と矛盾しない。

引用文献

Bartlett, Harriett M. (1970) *The Common Base of Social Work Practice*. Natl Assn of Social Workers Pr. (＝小松源助翻訳(1978)『社会福祉実践の共通基盤』ミネルヴァ書房.)

Bogo, Marion (2010) *Achieving Competence in Social Work Through Field Education*. 2nd. Buffalo ; Toronto：Univ of Toronto Pr.

Bogo, Marion・高橋重宏 (1991)「トロント大学大学院ソーシャルワーク学部におけるCBE〔Competency Based Education〕の最近の発展-コンペテンシー要素・技能,評価表を中心に」.『社会福祉研究』51. 15-21.

千葉伸彦・富樫亜紀子・小崎浩信・広浦幸一(2010)「福祉施設が人材に求めるコンピテンシー-A県内福祉施設および機関アンケート調査結果から」『東北福祉大学研究紀要』34. 93-102.

CSWE; Council on Social Work Education (2015) “2015-Educational Policy and Accreditation Standards”（Retrieved 2019.9.1,https://cswe.org/getattachment/Accreditation/Standards-and-Policies/2015-EPAS/2015EPASandGlossary.pdf）

富士福祉会(2009a)『精神障害者の地域生活移行支援者コンピテンシー概要版』社会福祉法人　富士福祉会.

富士福祉会(2009b)『精神障害者の地域生活移行支援者のコンピテンシーモデルと育成システムに関する研究』社会福祉法人　富士福祉会.

藤田久美・山本佳代子・青木邦男(2008)「社会福祉教育におけるコンピテンシー評価項目の検討」『山口県立大学社会福祉学部紀要』14. 65–78.

福島喜代子(2005)『ソーシャルワーク実践スキルの実証的研究　精神障害者の生活支援に焦点をあてて』筒井書房.

福島喜代子(2009)「第2章　相談援助の定義と構成要素」社会福祉士養成講座編集委員会編『新・社会福祉士養成講座6　相談援助の基盤と専門職』中央法規出版.16–37.

原順子(2009)「聴覚障害ソーシャルワーカーのコンピテンシーに関する一考察：Sheridan & White論文”ろうと難聴”から考える」『四天王寺大学紀要』48. 93–106.

橋本有理子・柿木志津江・小口将典・種村理太郎・清原舞・中島裕・得津愼子(2015)「コンピテンシーにみる社会福祉士養成課程実習生の学修の現状と今後の展望：コンピテンシーシートを用いた実習生による自己評価の結果をふまえて」『関西福祉科学大学紀要』19. 59–71.

北海道ブロック実習前評価システム検討小委員会(2015)『実習コンピテンス・アセスメント（２０１５年度版）』

細谷治(2019)「第3部資料編①解説集G」柴崎智美・米岡裕美・古屋牧子編『保健・医療・福祉のための専門職連携教育プログラム:地域包括ケアを担うためのヒント』ミネルヴァ書房.125–32.

保正友子(2009)「ソーシャルワーカーのコンピテンスの特性についての試論–コンピテンスの性質と構成要素についての先行研究の整理」『立正社会福祉研究』11 (1) . 37–43.

保正友子(2013)『医療ソーシャルワーカーの成長への道のり―実践能力変容過程に関する質的研究』相川書房.

池田雅子(2005)「社会福祉実習教育における学生の自己コンピテンス・アセスメントの活用について–コンピテンス評価結果の分析を通して」『北星学園大学社会福祉学部北星論集』42. 49–65.

井上浩(2014)「ソーシャルワーク教育における”Competency Based”概念の必要性」『兵庫大学論集』19. 11–21.

井上貴詞(2010)「福祉人材の育成とコンピテンシー―主任介護支援専門員の育成の課題に焦点をあてて」『キリストと世界：東京基督教大学紀要』20. 1–39.

井上貴詞(2012)「介護支援専門員に求められる実践能力の研究(1)内容分析による実践能力の概念構造化」『キリストと世界：東京基督教大学紀要』22. 29–58.

伊藤冨士江(2008)『わが国におけるソーシャルワーク実践の展開―小松源助先生の研究業績の継承を願って』川島書店.

上白木悦子(2018)「緩和ケア・終末期医療における医療ソーシャルワーカーの役割遂行の構造に関連する要因」『社会福祉学』59(3). 16–29.

Kane, Michael T (1992) “The Assessment of Professional Competence” *Evaluation & the Health*

Professions,15(2):163-82.
関西学院大学実践教育研究会(2014)『ソーシャルワーク実習プログラミングワークブック：実習先-養成校-実習生が協働するメリット』みらい.
木原活信「社会福祉士がとらえる相談援助　第2節　相談援助サービスの視座」(2009)社団法人 日本社会福祉士会編『新社会福祉援助の共通基盤 上』第2版.中央法規出版.208-13
菊地和則(2004)「多職種チームのコンピテンシー：インディビデュアル・コンピテンシーとチーム・コンピテンシーに関する基本的概念整理」『社会福祉学』44 (3). 23–31.
菊地和則(2009)「協働・連携のためのスキルとしてのチームアプローチ」『ソーシャルワーク研究』34 (4). 291–97.
菊池健志(2006)「地域福祉コーディネーターに求められるコンピテンシーに関する研究」『神奈川県立保健福祉大学誌』3 (1). 49–58.
厚生労働省社会・援護局(2019)「社会福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて」(2019年9月5日取得, https://www.mhlw.go.jp/content/000523365.pdf)
松岡千代(2009)「多職種連携のスキルと専門職教育における課題」『ソーシャルワーク研究』34 (4). 314–20.
松岡克尚(2001)「『ネットワーク・アプローチ』における実践戦略についての考察–『コーディネーション能力』概念をもとにして」『社会福祉実践理論研究』10. 25–36.
守本友美(2010)「ボランティアコーディネーター養成におけるコンピテンスの検討」『皇學館大学社会福祉論集』13. 27–35.
村井美紀 (2009)「第7章　実習指導方法論Ⅲ」社団法人 日本社会福祉士養成校協会編『相談援助実習指導・現場実習教員テキスト』中央法規出版. 205–34.
村井美紀 (2014)「第６章　実習スーパービジョンの理解」長谷川匡俊・上野谷加代子・白澤政和・中谷陽明編『社会福祉士 相談援助実習』第２版.中央法規出版. 90–101.
Mulder, Martin (2014) “Conceptions of Professional Competence” *International Handbook of Research in Professional and Practice-Based Learning*, 107–37.
小原眞知子(1997)「ソーシャルワーク実践の専門性に関する一考察：コンピテンス(Competence)概念からの検討」『社会福祉』(日本女子大学社会福祉学科)38. 68–79.
小原眞知子(2010)「保健医療分野におけるソーシャルワーク専門性と職務満足度の関連性について」『社会福祉』(日本女子大学社会福祉学科)51. 19–39.
オックスフォード大学出版局（2010）『オックスフォード現代英英辞典第8版』旺文社.
岡本民夫・平塚良子(2004)『ソーシャルワークの技能―その概念と実践』ミネルヴァ書房.
大木秀一(2013)『看護研究・看護実践の質を高める文献レビューのきほん』医歯薬出版.
奥田いさよ(1992)『社会福祉専門職性の研究：ソーシャルワーク史からのアプローチ：わが国での定着化をめざして』川島書店.

嶋田啓一郎(1972)「社会福祉における専門職化と法制化：『社会福祉士法』制定試案の検討」『社会福祉学』12. 1–21.

Spencer Jr. Lyle M. and Signe M. Spencer（1993）*Competence at Work: Models for Superior Performance*. Wiley. (=梅津祐良・成田攻・横山哲夫訳（2011）『コンピテンシー・マネジメントの展開』生産性出版.)

社団法人 日本社会福祉士養成校協会（2003）『平成14年度社会福祉士専門職教育における現場実習教育に関する研究』

社団法人 日本社会福祉士養成校協会(2004)『平成15年度 社会福祉士専門職教育における現場実習教育に関する研究』

社団法人 日本社会福祉士養成校協会(2005)『わが国の社会福祉教育，特にソーシャルワークにおける基本用語の統一・普及に関する研究』

社団法人 日本社会福祉士養成校協会(2009)『社会福祉士養成にかかる社会福祉援助技術関連科目の教育内容及び教員研修プログラムの構築に関する事業報告書』

社会保障審議会福祉部会(2006)「介護福祉士制度及び社会福祉士制度の在り方に関する意見」(2019年9月1日取得, https://www.mhlw.go.jp/shingi/2006/12/dl/s1212-4b.pdf)

社会保障審議会福祉部会 (2018)「ソーシャルワーク専門職である社会福祉士に求められる役割等について」(2019年9月1日取得, https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000199560.pdf)

種村理太郎・小口将典・柿木志津江・清原舞・橋本有理子・中島裕・得津愼子(2015)「社会福祉士養成教育における実習科目と演習科目との連動を重視したコンピテンシー・モデル(福科大版)の検討」『関西福祉科学大学紀要』19. 13–25.

谷口佳菜子(2018)「長崎国際大学国際観光学科・社会福祉学科・健康栄養学科の卒業生による学修成果の評価と総合的な満足度」『長崎国際大学論叢』18. 63–79.

東京都児童相談所コンピテンシーモデルワーキンググループ(2007)『児童福祉司のコンピテンシーモデル』東京都児童相談所.

辻岡綾・藤本慎也・川見文紀・松川杏・立木茂雄(2018)「福祉専門職防災研修に必要とされるコンピテンシーの考察」『東日本大震災特別論文集』7. 73-76

US National Library of Medicine(2019) “MeSH Browser”（Retrieved 2019.9.1, https://meshb.nlm.nih.gov/search ” professional competence”）

山辺朗子(2015)『ジェネラリスト・ソーシャルワークにもとづく社会福祉のスーパービジョン：その理論と実践』ミネルヴァ書房.

山辺朗子(2017)「第12章　ジェネラリストの視点と総合的かつ包括的なソーシャルワーク」相澤譲治監修・植戸貴子編『ソーシャルワークの基盤と専門職』第2版. みらい.201-14.

山口真里・西梅幸治・加藤由衣(2018)「コンピテンスを涵養する実習スーパービジョン：ソーシャ

ルワーク教育におけるコンピテンス概念の検討をとおして」『広島国際大学医療福祉学科紀要』14. 29–43.

山田容(2018)「第6章　幅広い実践力を持つ支援者の育成と多職種連携」村井龍治・長上深雪・筒井のり子編『現代社会における「福祉」の存在意義を問う：政策と現場をつなぐ取り組み』ミネルヴァ書房.132-148.

矢崎裕美子・中村信次(2018)「社会福祉実習経験によるコンピテンシーの変化：動機と実習によるバーンアウトに着目して」『日本福祉大学社会福祉論集』138. 63–74.

矢崎裕美子・中村信次・野寺綾(2012)「新しい学士課程観に基づくコンピテンシーの検討：『日本福祉大学スタンダード』と達成動機・親和動機との関連」『日本福祉大学子ども発達学論集』4. 77–84.

米本秀仁・安井愛美(1989)「実践構造論：序説」『社会福祉学』30 (2). 1–20.

渡辺孝雄(2005)「福祉産業におけるコンピテンシーに基づく人材重視の経営」『第一福祉大学紀要』2. 175–84.

White, Robert W. (1959) *Motivation reconsidered*：*The concept of competence* Psychological Review 66 (5). 297–333.

The review of a social worker's professional competence concept.
—Extraction of properties and elements by the review of literature in Japan

SUZUKI, Tomoko

Abstract：

The purpose of this research is to clarify concept properties and elements of professional competence of the social worker by the review of Japanese literature about the social work. 13 categories were extracted by qualitative integration of the description about the concept of "competence" and "competency" of the social worker.

As a result, the core concept of professional competence is defined as follows. It is the general capacity to utilize comprehensively and effectively elements of social work comprised of knowledge, skills and values in practice. Moreover, the factors which constitute knowledge, skills, and values were extracted from previous studies. In addition, ten elements about practice action of social work and five elements about personal qualities were extracted. These elements are competencies which constitute professional competence.

Keywords： professional competence, competency, literature reviews , Concepts, Social work